## Ⅲ　まとめ

実践の成果として次の①～⑤を挙げることができる。その成果は、総じて【A】～【E】の段階的な要素を螺旋(らせん)的に高めることを意図して学習過程を工夫した「説明的な文章の授業モデル」が、目的意識をもって文章を読み、最終的に自分の考えをもつ(言語化する)ことができる児童生徒を育てることができることを裏付けていると考える。

①「つかむ過程」で、題名や問題提起文から課題意識を引き出し、筆者の意見（結論）を踏まえて根拠（本論）を読むための「読みの課題」を設定させる学習指導は、「深める過程」において、児童生徒が、具体的な視点をもち、主体的に文章に働きかけようとする意欲を引き出すことに有効であることが分かった。

②「深める過程」で、児童生徒に「読みの課題」に沿って主体的に読み取りを進めさせる指導は、児童生徒が自分なりの興味・関心や問題意識をもって本論を読み、自分にとって必要な情報を把握し、そこに自分なりの意味を生み出す上で有効であることが分かった。

③「深める過程」で、生活体験や学習経験をかかわらせながら本文の内容を読み取ることは、そこに示されている多様な問題点を自分自身の問題としてとらえるとともに、その問題点に対する理解を深めたり、自分なりの解決策や改善策を考えたりして、思考を深めていく上で有効であることが分かった。

④「まとめる過程」で、「深める過程」において読み取ってきたことを振り返りながら、新たに自分が気付いたり考えたりしたことをまとめさせる指導は、教材文に書かれていた情報や友だちとの交流の中で得た情報等を、児童生徒が自分の中で関連させたり再構築したりすることで、新たな思考を生み出すことを可能にした。

⑤それぞれの過程において、児童生徒が考えたことを付せん紙や学習プリントにできる限り記述させ「言語化」を図ったことは、これまで漠然とした形でとどまっていた児童生徒の思考を完結させる上で有効であることが分かった。

課題としては、次の①～④が挙げられる。

①「深める過程」における指導においては、児童生徒の主体的な読み取りを基本として自力解決の時間を確保してきたが、自力解決の時間の確保だけでは、文章の細部の読み取りにおいて弱い面がある。

②文章の細部の読み取りについては、結論につながる本論の重要な部分に児童生徒が気付くような発問を準備しておいたり、それまでの児童の気付きを生かしながら、結論につながる重要な部分を引き出す全体交流の場面を設定する必要がある。

③どの段階まで児童生徒の主体的な読み取りを待ち、どこで、どのように教師が指導していけばそれまでの児童生徒の思考の流れを妨げずに大事な部分に気付かせていくことができるのかを、毎時間の児童生徒の読み取りの段階を確実に把握することで明らかにする必要がある。

④児童生徒の読み取りの段階における学習の姿・状況を確実に把握するには、児童生徒の具体的な読み取りの姿として表わしている評価項目を設定しておくことが大きな助けになると考える。

以上のような成果と課題を基にして、今後「説明的な文章の授業モデル」をより実践に即したモデルにしていくこととともに、「文学的な文章の授業モデル」も構想していくことが、思考力に焦点化した「確かな学力」を向上させる上で必要であると考える。